

「女性と教育（国際比較）」について考える

オランダの子育て 日本の子育て

平成 26 年 11 月 18 日 佐藤淑子

1) 「世界で一番幸せな子どもたち オランダ」

2013 年 ユニセフ・イノチェンティ調査結果（比較する日本データはない）

子どもたちの客観的幸福度

- ・「物質的幸福度」1 位
貧困の少なさ・格差の少なさ
- ・「健康と安全」1 位
乳幼児死亡率，低体重児の出生率，予防接種の普及，死亡率(1 歳～19 歳)
- ・「教育」1 位
就学前教育，義務教育後（15～19 歳まで）の教育，ニートの割合，PISA の学力
- ・「食事・運動の状況と非行・けんか・いじめの少なさ」1 位
肥満少ない，朝食は必ず食べる，アルコール摂取少ない，いじめ少ない
- ・「住宅・環境」4 位
住宅事情よい

子どもたちの主観的幸福度

- ・両親や仲間との関係 1 位

2) オランダの就労

- ・少子化，不況からの脱出，ワーク・ライフ・バランスの実現
- ・ワッセナー条約政府・企業・労働組合の 3 者連携
- ・フルタイムの被雇用者の 1 年間の労働時間
1970 年 2007 時間 2005 年 1720 時間に減少
- ・1996 年施行の「労働時間差別禁止法」は，フルタイム労働とパートタイム労働間の雇用条件（賃金・社会保険・育児・介護休暇）の平等を実現した。
- ・2000 年には「労働時間調整法」により，労働者は，時間当たり賃金を維持したままで，自ら労働時間を短縮・延長する権利が認められるようになった(権丈 2012)。つまり，フルタイム労働とパートタイム労働の相互転換は労働者の請求によって自由となる。
- ・現在は労働 1 時間当たりの GDP が高く，失業率が低く，合計特殊出生率が回復したオランダ

3) オランダの女性の就労

こうした一連の労働政策と女性労働への意識の変化を背景に，女性の就業率が上昇し，

家庭の所得増。パートタイマーを中心に，成人女性の社会進出率は 1981 年の 40%程度から，2010 年には 70%を超える状況になった。

- ・もともとオランダ社会は結婚と同時に仕事を辞める女性が圧倒的に多く，既婚女性は専業主婦であることが当たり前だった。
- ・そうした状況は 80 年代から 90 年代にかけて一変し，結婚後も就業を継続したり，あるいは一旦退職したのち再び働き始めたりする女性の数が急速に増えた。
- ・さらに 2000 年代に入ると，結婚や出産によって就労を中断する女性が極端に減り，年代別の女性労働力率のカーブは，ほぼ台形型に近づきつつある（中谷，2011）。

4) オランダのワーク・ライフ・バランス（仕事と生活の調和）と男女の働き方の「組合わせの技法」

- ・夫のワーク・ライフ・バランスと妻のワーク・ライフ・バランスを「組み合わせ」として検討した。
- ・男性のパート・タイム比率は EU27 カ国中最も高い。そして，オランダでは「フルタイムの仕事に就きたかったが，やむを得ずパートタイムの仕事に就いている」という非自発的なパートは少ない（権丈，2009）。ワーク・ライフ・バランスを楽しみたいという価値態度が夫婦共にある。オランダは現在，経済社会パフォーマンスも悪くなく，失業率も低い。
- ・アンペイドワーク(無償労働：家事やケア)におけるジェンダー分業の是正。
- ・夫婦の働き方の組み合わせ自由という「1.5 稼ぎ型」のモデル。
(夫 1 + 妻 0.5 / 夫 0.75 + 妻 0.75 / 妻 1 + 夫 0.5)
フルタイム勤務を続ける男性たちも，1 日の勤務時間を週 8 時間から 9 時間に増やす代わりに週 4 日勤務としたり，育児休暇を活用することによって，週末以外の 1 日を家で子どもの世話をする時間に充てたり，育児に積極的に関与する。
- ・「育児休業制度」を利用する父親は日本では少ないが（0.5%），オランダは父親の育児休業取得率が 17.9%。夫婦間のワーク・シェアリングが見られる。

5) 女性の生き方の日蘭比較

学齢期の子どもを持つ母親の就業率はオランダでは高学歴ほど高い(欧州連合統計局の欧州労働力調査 2009 年データ)。他方，日本の場合は，高学歴女性ほど就業率が低いという「ダグラス・有沢の法則」がまだ成立していて，働かない傾向にある。高学歴女性ほど，一旦離職した場合にそのまま労働市場から引いてしまう。フルタイム職への復帰難しく，二世帯同居の家族であっても，再就職への環境が必ずしも整わない。

日本もある意味では「1.5 稼ぎ型」であるが，それは「男性が主たる稼ぎ手としての役割を担い，女性が家事・育児を主に担いながらパートタイマーとして家計補助的労働に従事するという男女の役割モデル」である（権丈，2009）。

この背景にある要因：

- ・日本人男性の長い労働時間
- ・日本社会の強い性別役割分業意識
- ・日本とオランダでは収入を伴う家庭外労働（ペイドワーク）と無報酬の家庭内労働（アンペイドワーク）に対する価値態度の違い

6) 日本の女性の「育児不安」(佐藤, 2012)

国際比較をすると、日本の母親の育児不安が高いことが明らかである。その背景には、「父親の育児関与の低さ」がある。また、「女性が出産後、仕事を継続する率が低い」ことが将来への展望を不透明にさせている。つまり、男女どちらもワーク・ライフ・バランスが取れていない状況にある。

・乳幼児を持つ夫婦の育児の協同に関する研究では、高学歴無職の母親の育児不安は高かった。

・妻がパートタイムで働く家庭のストレスが著しかった。専業主婦と同程度にしか、夫の家事・育児のサポートが得られない。妻がフルタイムで働く家庭、妻が専業主婦の家庭と比べ、父親、母親ともに子育てへの肯定感は低く、子育てへの否定感が高い。

7) 乳幼児を持つ夫婦の育児の協同の日蘭比較

現在、日本とオランダの乳幼児を持つ夫婦の育児の協同の比較研究を行っている(佐藤, 2013)が、オランダの夫婦は子育てへの否定感が低く、自尊心が高く、ストレスも低い。また、夫婦間コミュニケーションも日本より良い。

日本とオランダは、同じように母親の家庭における育児を重視してきている。前述のように、80年代以降、オランダの人々の価値態度は大きく変化した。オランダでは夫婦のワークシェアリングをベースに、保育所の利用だけでなく、積極的にプレイグループに参加しながら基本的には家庭で育児をという理念を守ってきていることが特徴(松浦, 2011)。

8) オランダの夫婦の出産と育児

日本では里帰り出産が多く、新生児の世話は母親と実家の母親が共同する形になる。

他方、オランダでは夫婦で出産を迎える。赤ちゃんが生まれると、産院から産後ケアの病院に移り、家族でステイする。赤ちゃんの沐浴は看護師が父親に教える。職場でも、乳児がいると残業せずに帰宅することをすすめる雰囲気があるという。

妻が実家にひとり帰っての出産ではなく、アウトソーシングしながら、出産を夫婦で乗り切れることは、それ以降の父母の育児の協同のスタンスに影響を及ぼすものと考えられる。

9) 「足ることを知る」オランダの社会

質素で堅実な家計。お金を使わないレジャー。オランダは「男女も老いも若きも、みんな

なが働き，認め合える社会，生き生きと働きやすい社会，働きながらゆとりを持って子育てができる社会」(峯村，2010)

人々の日常生活は家族へのケア，趣味，親族・友人との交流など様々な要素から成り立っており，仕事だけを神聖視する意識は男女ともに薄い(中谷，2011)

ワーク・シェアリングの進んだ社会は親たちが家庭で子どもと接する時間が保証でき，子育てが終わると親たちは希望すればまたフルタイムの勤務に戻れる。こうした社会は子どもだけでなく大人も幸福感を感じられるのでは(吉瀬，2012)

10) オランダの女性たち

- ・ オランダ社会はジェンダーフリーな社会ではなく，女性がそれを容認しているような風土もある(松浦，2011)。
- ・ 夫婦双方が育児に関わる努力をしており，母親が育児に専念すべきだとする考え方に代わって，両親による子育てが重視されている状況。「従来の男性スタイルで働く」ことを標準とし子育ての両立を図るのではなく，働き方を選ぶことによって解決するフルタイムであれば夫婦共に4日間(4×9時間)など(中谷，2008)。

参考文献：

- Kramarz, F., Cahuc, P., Schank, T., Skans, O.N., Lomwel, G., & Zylberberg, A., 2006, Labour Market Effects of Work-Sharing Arrangements in Europe. www.frdp.org/upload/file/report_2-new.pdf
- Willemsen, Jacobs, Vossen, and Frinking, 2001, An Impact Assessment of Policy Measures to Influence the Gender Division of Work. <http://evi.sagepub.com> .
- 権丈英子 2012, 「オランダにおけるワーク・ライフ・バランス」, 武石恵美子(編), 『国際比較の視点から日本のワーク・ライフ・バランスを考える』 ミネルヴァ書房
- 松浦真理 2011, 「オランダモデルの内実 子育ての伝統と女性の就労」 白梅子ども学講座 第5回発表(2011年12月10日)
- 峰村武子 2010, 『オランダの教育に学ぶ豊かさを求めて』 ほおずき書籍
- 中谷文美 2008, 「働くことと生きること オランダの事例にみるワーク・ライフ・バランス」 倉地克直・沢山美果子(編), 『働くこととジェンダー』, 世界思想社
- 中谷文美 2011, 「組合せの技法：オランダ流ワーク・ライフ・バランスとは」『民博通信』 No. 133, pp.28 - 29 .
- Nakatani, A., 2010, From Housewives to “Combining Women”: Part-Time Work, and Emancipation in the Netherlands “『日蘭学会誌』第34巻1号 pp.1 - 22 .
- 佐藤淑子 2012, 父親と母親の職業生活及び家族生活と家事・育児行動 『鎌倉女子大学紀要』第19号, pp.25 - 35 .
- 佐藤淑子 2013, 性別役割分業意識と子育てとの関わり, 異文化間教育学会第34回大会発表抄録, pp.192-193 .
- 吉瀬亜希子 2012 「幸福度世界一」の国, オランダの教育に学ぶ, 『在外教育施設における指導実践記録』第34集